

〔論 文〕

マニエリスム期における メディチ家の宝物コレクション

松 本 典 昭

はじめに

1537年に初代フィレンツェ公アレッシンドロが暗殺されたとき、彼を継いだのは、コジモ・イル・ヴェッキオの弟ロレンツォ・イル・ヴェッキオ(1395-1440)から数えて5代目の子孫コジモ1世(1519-74)である。彼は1537年に第2代フィレンツェ公、1569年に初代トスカーナ大公となる。その長男フランチェスコ1世(1541-87)が第2代トスカーナ大公、その弟フェルディナンド1世(1549-1609)が第3代トスカーナ大公である。本稿は、トスカーナ大公国の初期3代大公の時代の宝物コレクションをとりあつかう。コジモ1世妃エレオノーラ・デイ・トレド(1522-62)もフェルディナンド1世妃クリスティーン・ド・ロレーヌ(1565-1637)もメディチ・コレクションに重要な貢献をすることになる。

この時期の代表的な「驚異の部屋」は、コジモ1世時代がパラッツォ・ヴェッキオ内の「ゲアルダローバ」と「スクリットイオ・デイ・カリオベ」と「地図の間」、フランチェスコ1世時代がサン・マルコ修道院の隣の「カジーノ・デイ・サン・マルコ」とパラッツォ・ヴェッキオ内の「ストゥディオーロ」。そして、フランチェスコ1世の構想を継承してフェルディナンド1世時代に整備された、ウフィツィ宮殿内の「トリブーナ」である。この「トリブーナ」が16世紀から18世紀まで「驚異の部屋」の中核となるものである。

この時期のもっとも重要な財産目録は、コジモ1世時代の1553年の「ゲアルダローバ」の財産目録、フェルディナンド1世時代の1589年の「トリブーナ」の財産目録である。

15世紀のルネサンスは古代という時間の発見の世紀であったが、16世紀＝マニエリスム期の大航海時代は世界という空間の発見の世紀になる。もともと知られていたアフリカやアジアの外来物が増えるとともに、未知の文化圏であった新大陸アメリカの外来物が流れ込んでヨーロッパ人の耳目を驚かすことになる。

I コジモ1世のメダルと彫玉

1537年1月6日の公現節の夜に初代フィレンツェ公アレッシンドロ・デ・メディチが、親友を装っていたロレンツィーノ・デ・メディチに暗殺された。ロレンツィーノは市内の共和派に決起をうながすことなく、ポローニャ方面へ逃亡した。1月8日、暗殺が公表され、1月9日、急遽招集された48人評議会(元老院)は、アレッシンドロの後継者にメディチ家弟脈のコジモ1世を選出した。このときアレッシンドロ25歳、ロレンツィーノ22歳、コジモ17歳。

ロレンツィーノは1539年に『弁明』を書いて皇帝カール5世に献上したが、そのなかで自身をユリウス・カエサルの誅殺者ブルトゥスになぞらえて自身の行動を正当化している。それと同趣旨のメダルは《ロレンツィーノ・デ・メディチ》(ワシントン・D・C、ナショナル・ギャラリー)である。これは、ロレンツィーノ自身がパドヴァかヴェネツィアでジョヴァンニ・ダ・カヴィーノに注文して作らせたメダルで、前1世紀のローマで作られたメダルの表面「ブルトゥス」と裏面「2本の剣にはさまれたフェルト帽」と同じ構図である。ロレンツィーノのメ

ダル裏面には、自由を象徴するフェルト帽の下に「1月8日」という、暗殺公表日(またはローマ歴の1月6日にあたるので暗殺日)が刻まれている。「ロレンツィーノ=新ブルトゥス」という連想は、すでに1537年の亡命共和主義者の領袖フィリッポ・ストロツツィの手紙に記されており、1540年頃にはミケランジェロが《ブルトゥスの胸像》(バルジェッロ国立博物館)を亡命共和主義者のリドルフィ枢機卿に贈ったことからわかるように、広く共有されたイメージであった。18世紀に『弁明』が再発見されると、ヴィットリオ・アルフィエリ(1749-1803)、ジャコモ・レオバルディ(1798-1837)、アルフレッド・ド・ミュッセ(1810-57)らの文学者にも多大なインスピレーションを与えることになる¹⁾。

一方のコジモ1世もすぐにメダル《コジモ・デ・メディチ》(ロンドン、大英博物館)を発行して、アレッシンドロの正統な後継者であることを主張した。表面の銘文は「COSMVS. MED [ICES]. FLORENTIAE. DVX. II. (第2代フィレンツェ公コジモ・デ・メディチ)」、裏面の銘文は「ALEXANDER. MED [ICES]. FLORENTIAE. DVX. P [RIMVS]. (初代フィレンツェ公アレッシンドロ・デ・メディチ)」である。コジモ1世のプロフィールは、ポントルモの素描に基づいている。アレッシンドロ公のメダルと比較すると、「共和国」の文字が削除されていることが注目される。コジモ1世のメダルは、ユリウス・カエサルを継承した初代ローマ皇帝アウグストゥスの古代のメダルの構図を模倣したものである。メダルの発行を通して、「ロレンツィーノ=新ブルトゥス」と「コジモ1世=新アウグストゥス」のプロパガンダ合戦を展開したのだ²⁾。新聞も雑誌もない時代、発行数の点でメダルは絵画以上に有効なプロパガンダの媒体(メディア)だった。プロパガンダ合戦に勝利したのは、各種の銘文とシンボルを駆使して圧倒的多数のメダルを鑄造したコジモ1世の側である。コジモ1世は生涯にわたり、ヴィンチェンツォ・ボルギーニとジョル

ジョ・ヴァザーリのデザインをメダルにして数々の偉業をヘラクレスの功業に喩えて喧伝していった。たとえば、1548年のエルバ島の要塞建設、1555年のシエナ戦争の勝利、1562年のサント・ステファノ騎士団の創設などである³⁾。コジモ1世は彫玉でも《アウグストゥス》(国立考古学博物館)のイメージを好んだ。この《アウグストゥス》の肩のところには山羊座の徴があり、これがコジモ1世と同じ上昇宮であることから、「コジモ1世=新アウグストゥス」の同一化のシンボリズムとして多用された。共和制復活の世論喚起に失敗したロレンツィーノは1548年、コジモ1世の放った刺客の手にかかってヴェネツィアで暗殺されることになる。

さて、アレッシンドロ公の寡婦マルゲリータ(皇帝カール5世の庶出の娘)はわずか半年ほどの結婚生活だったが、彼女の政治的価値は、コジモ1世も皇帝カール5世もファルネーゼ家出身の教皇パウルス3世も熟知していた。結局、翌年、マルゲリータはメディチ家の遺産をもってオッタヴィオ・ファルネーゼと再婚した。コジモ1世が獲得したのはメディチ邸だけであり、彼が1539年に作らせた最初の財産目録によれば、コジモがマルゲリータから得た遺品は、わずか7点にすぎない。それでも目録には甲冑数点、馬具数点、椅子数点、そしてやがてコジモ1世のコレクションの中核となる磁器は70点弱、メダルは642点が記録されている⁴⁾。

コジモ1世が「鉄の意志」をもつ果敢な若者だったことは、水晶製インタリオ《コジモ1世の肖像》(銀器博物館)からも想像しうる。彼はマルゲリータを得られなかった代わりに、1539年、スペイン人のナポリ副王ドン・ベドロ・アルバレス・デ・トレドの17歳の次女エレオノーラと結婚し、翌1540年、共和国の政治的中心だった政庁舎すなわち現在のバラツォ・ヴェッキオに家族とともに移り住んだ。このときからコレクションは増大していく。1555年にはシエナ戦争に勝利し、1557年にはスペイン王フェリペ2世(在位:1556-98)からシエナを封土として与えられ、1559年には教皇ピウス5世

(在位：1566-72) からトスカーナ大公の称号を与えられた。

公妃エレオノーラも彫玉のコレクションの拡大に貢献した。彼女は1556年、ローマ在住のルイジ・マイオーロを通じて《牧歌的場面》(考古学博物館)や《ソクラテス》(銀器博物館)を入手し、1562年には、ジョヴァン MARIA・ディ・ヤコポ・ヴェネツィアーノから紫水晶製インタリオ《ヘラクレスの頭部》(銀器博物館)を購入した。また、同じ1562年には、ミラノ出身の彫玉師兼仲介商人ガスパロ・ミゼローニ(1518-73)から美しいカメオ《フェリペ2世の肖像》(銀器博物館)を獲得した。エレオノーラの帳簿にはカメオの製作者名は記されていないが、製作者はガスパロ・ミゼローニ本人か、あるいはそうでなければ、1559年からフェリペ2世の宮廷で仕事をしていたヤコポ・ダ・トレツォの可能性が高い。製作年は1559-62年頃である。このカメオの裏面には、フェリペ2世の10代の長男《ドン・カルソスの肖像》が彫られている⁵⁾。

506 ドゥカートで購入したことがわかっている古代のカメオ《クビドとプシケの結婚》(ボストン美術館)には、アウグストゥス帝に仕えたギリシア人の宮廷彫玉師トリフォンの銘がある。このカメオは1572年以前にセンチヌムから出土したもので、ヴァティカンの商人が購入したあと、メディチ・コレクションに入ったが、17世紀初頭には画家ルーベンスが所有しているため、フィレンツェにあった期間は短かった⁶⁾。

16世紀で最大最高の傑作カメオは、18.5センチ×16.5センチの縞瑪瑙製カメオ《コジモ1世とエレオノーラ・ディ・トレドと子どもたち》(銀器博物館)である。製作者は有名なミラノ人彫玉師ジョヴァンニ・アントニオ・デ・ロッシ(1517-75)。製作年は1559年から1562年頃。家族に公的なポーズをとらせることで、古代の巨大カメオの様式を模倣している。家族のうえを飛翔するのはラッパを吹く有翼の「名声」である。中央に空いた円形の空間には、ドメニコ・ディ・ポーロ作(?)のブロンズ製メダル《フィオレンツァ》(バルジェッロ国立博物館)がはめ

込まれていたはずである。ヴァザーリは『美術家列伝』第2版(1568年)で、このカメオに言及しているが、記述はやや不正確である。実際に彫られた子どもの人数は5人なのに、ヴァザーリは7人の名前をあげているし、逆に「名声」についての言及がない。かつカメオを取り囲んでいたはずの豪華な金製縁飾り(ヴァザーリに帰される素描にはメディチ=トレド家の紋章のついた縁飾りがついている)にも触れていない。ただし、子どもの人数については、カメオの両端が破損した形跡があることから、7人のうちの2人が欠けた可能性も否定できない。ヴァザーリがあげる7人の子どもを生没年付きで列記すると、フランチェスコ(1541-87)、枢機卿ジョヴァンニ(1543-62)、ガルツィア(1547-62)、フェルディナンド(1549-1609)、ピエトロ(1554-1604)、そしてイザベッラ(1542-76)とルクレツィア(1545-61)である。いちばん幼いピエトロは下方で金羊毛勲章(1545年、コジモ1世が皇帝カール5世から授与された)を手にして遊んでいる。ここに結婚の翌年に生まれた長女マリア(1540-57)の名前がないのは、カメオ製作時にすでに亡くなっていたからである。さらに1561年にはルクレツィアが死去、1562年11月から12月にかけてはエレオノーラ、ジョヴァンニ、ガルツィアが相次いで病死した。その直前の1562年7月にカメオはロッシの滞在先ローマからフィレンツェに送られたことが史料で確認されている。つまりこのカメオは家族の幸福の絶頂の最後の瞬間を記念するものになったのだ。このカメオは、1587年までパラッツォ・ヴェッキオ内の「ゲアルダローバ」に置かれたのちに、ウフィツィ内の「トリブーナ」に移されて、1589年の「トリブーナ」の最初の財産目録に記録されている⁷⁾。

コジモ1世とエレオノーラは相思相愛の夫婦だったために、1562年の悲劇はコジモ1世の心身に甚大な打撃を与えた。やがて若い愛人との愛欲に溺れ、1570年にローマでトスカーナ大公の戴冠式を終えて帰国した直後に、愛人カミッラ・マルテッリ(1545-90)とひっそりと再婚す

る。この再婚を認めない長男フランチェスコから非難されつづけたまま、植物状態のコジモ1世は1574年に54年と数カ月の生涯を閉じた。

その1574年、フランチェスコ1世がローマ在住の彫玉師ドメニコ・コンパーニ通称ドメニコ・デ・カンメイに瑠璃製カメオ《コジモ1世とエレオノーラ・ディ・トレドの肖像》(銀器博物館)を発注している。コジモ1世はクラミスという古代ローマの男性用の肩でとめる短いマントをまとい、1570年に戴冠された大公冠を連想させる放射状の冠をかぶっている。一方、古代服をまとったエレオノーラは耳に大粒の真珠のイヤリングをつけ、小粒の真珠をちりばめたネットで髪をまとめあげている。向かい合う2人は、古代ローマの貨幣が彫玉を思わせる理想的な夫婦像である⁸⁾。前述のロッシ作品は生き生きとした生前のカメオ、このコンパーニ作品はやや様式化した追悼カメオである。カミッラ・マルテッリを排除しつつ、すでに2人の神格化が始まっているのだ。

II コジモ1世とパラッツォ・ヴェッキオ

1540年5月15日、コジモ1世は公妃エレオノーラといっしょにメディチ邸から政庁舎パラッツォ・ヴェッキオに居を移した。以後、改築が実施され、メディチ・コレクションは3階に新しくできた「ゲアルダローバ」の6室に置かれた。「ゲアルダローバ」は「衣装部屋」の意味だが、衣装部屋だけでなく、美術工芸品の蒐集室や製作工房、さらには迎賓の間もかねていた。この「ゲアルダローバ」のまま呼んでおく。ここはヴァザーリ時代に「地図の間」に改築されたので、当初の正確な間取りを再現することは不可能である⁹⁾。

1553年の「ゲアルダローバ」の財産目録¹⁰⁾によれば、ラファエッロ作《レオ10世と2人の枢機卿》(ウフィツィ美術館)、ティツィアーノ作《ピエトロ・アレティーノ》(ピッティ美術館)、チェッリーニ作《コジモ1世の胸像》(バル

ジェッロ国立博物館)などの名作が揃っていた。この《コジモ1世の胸像》は、1557年にエルバ島に送られることになる。他にも宮廷画家ブロンズイーノの肖像画や宮廷彫刻家バンディネッリの彫刻の数々があったし、なによりも古代彫刻から16世紀の彫刻、とりわけブロンズ像や小ブロンズ像が充実しており、この分野へのコジモ1世の並々ならぬ偏愛ぶりがうかがえる¹¹⁾。技巧を誇示するブロンズ作品《絡み合う蛇と蜥蜴》(バルジェッロ国立博物館)などは、人目を驚かす形状が時代の趣味を反映している。マニエリスム美術の特徴のひとつは「蛇状曲線(フィグーラ・セルペンティナータ)」であるが、これはまさに「蛇状曲線」以外の何ものでもない。

「ゲアルダローバ」には絵画や彫刻のほかにも、金銀細工、象嵌細工、貴石細工、磁器、武器、彫玉などがたくさんあり、ここで製作にいそしんだ職人には、1545年にフランスから帰国したベンヴェヌート・チェッリーニを筆頭に、ドメニコ・ボッジーニ、ジョヴァンパオロ・ボッジーニ、バスティアーノ・チェンニーニ、ベルナルド・バルディーニ、ドメニコ・ディ・ポーロらがいた。1545年には、フランドル出身のニココロ・カルカ(1562年没)とジョヴァンニ・ロスト(1564年没)をそれぞれマントヴァとフェッラーラから招聘して、「ゲアルダローバ」内に24機の織機を有するタベストリー工房を設立した¹²⁾。

注目すべきは、1539年のメディチ邸の財産目録にも、1553年の「ゲアルダローバ」の財産目録にも、大航海時代の影響をうけて、早くも新大陸アメリカからの「外来物」(エクソティカ)が数多く記録されていることである。

スペイン人エルナン・コルテス(1485-1547)の船団は、アステカ最後の皇帝モクテスマ2世(在位:1502-20)から贈られた金銀細工、羽細工、織物、トルコ石の仮面などを満載して1519年にセビーリャに帰航し、スペイン王カルロス1世(皇帝カール5世)に献上した。翌年には新大陸の外来物はトレド、バリャドリド、ブリュッセルで公開された。当時、ブリュッセルにいた画家アルブレヒト・デューラーは「見知

らぬ土地にいる人びとの名状しがたい才能に驚愕した」と書き記している¹³⁾。

すでに1539年の財産目録には、インディアの羽飾り、トルコ石の仮面、小さな貴石製動物頭部像などが記載されている。これらの品々は1553年の財産目録にも継承され、さらに点数を増しているが、明確な地理上の区分では分類されておらず、インディアの羽のベッドカバーは「獣皮」に、アステカのトルコ石製の仮面や小さな貴石製動物頭部像は「宝石」に、インディアの羽の肩掛けは別の雑多なカテゴリーに分類されている。雑多なカテゴリーには、アメリカの工芸品以外に、トルコの武器多数、時計数点、魚の歯数点、牡蠣の貝殻数点、竹竿数点、碧玉製の犬1点、ワニ1点、象の歯(象牙ではない)4点、地球儀1点、魚の骨1点、7本の歯のついた象の顎骨1点など、多様な珍品希物が雑然と混在していた。

1555年、ヴァザーリがコジモ1世に伺候すると、パラッツォ・ヴェッキオの大改造が本格化した。「スクリットイオ・ディ・カリオペ」(1555-58年)、「コジモ公の部屋」(1559-61年)、「公爵のスタンツィーノ」(1559-61年)、「公爵のスクリットイオ別称テゾレット」(1559-61年)、「地図の間」(1563-65年)が相次いで建造されたが、このうちコジモ1世時代の宝物室として重要なのは、「スクリットイオ・ディ・カリオペ」と「地図の間」である。

「スクリットイオ・ディ・カリオペ」は3階の「四大元素の区画」に作られた小部屋で、天井にヴァザーリが芸術神カリオペを描いたことから、この名がついている。1559年から60年にかけて、「ゲルダローバ」の宝物59点がここに移され、古代彫刻から自然の珍品奇物、メダル、カメオ、貴石、細密画まで、あらゆる貴重品が収納展示された。なかにはドナテッロ、サンソヴィーノ、チェッリーニ、バンディネッリらの彫刻作品と並んで、アステカの小さな動物頭部像や小さな人物像が含まれている。

当時、イタリアでもっともよく知られた古代彫刻は、1489年に発掘された《ベルヴェデーレ

のアポロン》(ヴァティカン美術館)と1506年に発掘された《ラオコーン》(ヴァティカン美術館)であったが、そのブロンズ製の模刻像《ベルヴェデーレのアポロン》(ウフィツィ美術館)と《ラオコーン》(バルジェッロ国立博物館)もあった。とくに《ラオコーン》はいろいろの大きさと素材でいくつもの模刻が作られたが、高さ32.2センチの小品は、雄渾なオリジナル作品がもつダイナミックな大きさを感じさせる名人技を示している。

ヴァザーリは1553年にアレッツォから出土したエトルリア彫刻の最高傑作《キマイラ》(考古学博物館)を「スクリットイオ」に置くつもりだった。キマイラは頭がライオン、胴体が牡山羊、尻尾が蛇という神話上の怪物である。この彫刻の修復を担当したチェッリーニは、「そのキマイラとともに、やはりブロンズ製で、かなりの量の小ぶりの像が出土し、どれも泥と錆におおわれ、あるいは頭部、あるいは足か手が欠けているものばかりだった。公爵はみずから彫金師の鑿でそれらの小像を削り磨きなおすのを楽しみにしていた。」¹⁴⁾と、コジモ1世のエトルリア彫刻への熱中ぶりを記録している。しかし《キマイラ》は「スクリットイオ」に移されることなく、2階の「五百人広間」に隣接する「レオ10世の区画」に1718年まで置かれることになる。1581年(フランチェスコ1世時代)にフィレンツェを訪問して《キマイラ》を見物した『エッセ』の作者ミシェル・ド・モンテーニュ(1533-92)は、6月24日のサン・ジョヴァンニ祭には「大公の宮殿が公開されて、どこにでも入ってゆくことができたため、田舎の人たちで賑わっていた」と述べている¹⁵⁾。

《キマイラ》に代わって「スクリットイオ・ディ・カリオペ」に置かれたのは、1541年にアレッツォ周辺で出土し、約10年後に購入されたエトルリアのブロンズ像《アテナ》(考古学博物館)である。ヴァザーリはこの部屋を「エトルリア陳列室」にしようと考え、ミケランジェロの《河神》の模刻像(バルジェッロ国立博物館)にいたる、トスカーナの連綿たる文化的連

続性を強調しようとした。これはトスカーナ王位を希求するコジモ1世をエトルリア王の末裔に仕立てようとする当時の文化政策の一環だったが、前述のように雑多な珍品奇物や外来物が移ってきたために、ヴァザーリの初期構想の理念は不明瞭なものになってしまった。

「スクリットイオ・ディ・カリオペ」が歴史性を探究しようとしたのに対して、3階の「地図の間」は、明らかに空間性を探究している。ヴァザーリの構想では、この部屋は「宇宙論(コスモグラフィア)の間」と呼ばれる予定だった。「大宇宙(*gran Cosmo*)」と「偉大なコジモ(*gran Cosimo*)」の掛詞によって、宇宙の中心としてのコジモ1世を称揚する意図があった。貴重品を収納した「胡桃材製の装飾豊かな高さ7ブラッチョの複数の戸棚」(ヴァザーリ)の中身と扉の地図は対応していたと想像したいところだが、実際の中身は素材別の分類だったので、両者に地理的な対応関係はなかった。1564年の財産目録によれば、ある1つの戸棚だけは、トルコ石の仮面、地球儀、碧玉製の犬、象の歯数点、ワニ1点、魚の骨数点、蟹の甲羅1点など、分類不能な「各種の品々」が収納されていた。

優秀な天文学者兼数学者で画家でもあったドメニコ会士のエニャツィオ・ダンティ(1536-86)が、コジモ1世に仕えるためにペルージャからフィレンツェに移住し、サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院に住み込んで、1563年、「地図の間」の戸棚の扉にする地図の板絵の製作にとりかかった。ダンティが描いた地図は53枚中の30枚であり、「日本(GIAPAN)の地図」を含んでいる。日本についての情報は、『アジアの数十日』の著書があるポルトガル人の博学者ジョアン・デ・パロス(1469-1570)との交流から得ていた¹⁶⁾。しかし新大陸アメリカの地図がかなり正確なのに比べると、極東の島国の形状は南北が逆でいかにも曖昧模糊としている。朦朧とした地理情報と高い文化レベルの情報とが結合し、逆にユートピア幻想をうむ源泉となったのかもしれない。

コジモ1世は仕事ぶりを見るためにわざわざ

サンタ・マリア・ノヴェッラ修道院に足を運んだだけでなく、修道会総長宛ての手紙で、「(ダンティが)修道院にこもることなく、宇宙論の仕事を続行できるように」パラッツォ・ヴェッキオに同居するように要望書を出したほどである。ダンティは「地図の間」のために、渾天儀(科学史博物館)と地球儀も製作した。部屋の真ん中に置かれた巨大な地球儀は、扉に描かれた地図の実際の地理上の位置を確認するのに役立ったはずである。

エニャツィオ・ダンティはコジモ1世が没するまでの11年間を親密に過ごし、メディチ・コレクションの増大にも一役かった。1566年にトラジメーノ湖畔で出土した《弁論家》(考古学博物館)の購入と運搬に関与したのが彼である。

エニャツィオ・ダンティが製作した天文器具のひとつに、昼夜平分時を観察する四分儀があり、これは1572年にサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂のファサードに設置された。この聖堂のためには渾天儀やグノモン(日時計の指時計)も製作した。のちにガリレオ・ガリレイが使った直径83センチの巨大な八角形のアストロラベ(科学史博物館)も彼の作とされている¹⁷⁾。

コジモ1世を継いだフランチェスコ1世は、ある兄弟会の圧力もあってエニャツィオ・ダンティを更迭し、代わってベネディクト会一派オリヴェト会の修道士ステファノ・ブオンシニョーリ(?-1589)を宮廷天文学者に任命した。彼は前任者に比べると科学的知識は乏しかったが、彼が継続して完成した「地図の間」の地図(20点)を見ると、絵画の腕前はさほど見劣りしなかったことがわかる。ただし、アフリカ奥地(ニジェール、ナイジェリア、スーダン)の地図には、北アフリカ出身の教父アウグスティヌス(354-430)の『神の国』に遠源のある噂話に基づいて、無頭人間や犬頭人間がいると信じ込んでいるのは、科学的な地図のなかで妙に非科学的な部分である。彼はフランチェスコ1世に捧げた有名な1584年の《フィレンツェ地図》(ウフィツィ美術館)の製作者としても名高い¹⁸⁾。

「地図の間」に世界と宇宙の全智識を集約するというコジモ1世とヴァザーリの理想は、戸棚の上の肖像と戸棚の下に配置される予定だった動植物にも表れている。大量の肖像画は、現在は四散してしまったが、そこにはコジモ1世の要望で、傭兵隊長、国王、皇帝、スルタン、英雄、文学者、メディチ家の人びと、詩人、公爵、枢機卿、教皇など、じつに240人を超える著名人が描かれていた。この百科全書的肖像画群は、1553年、画家クリストファノ・デッラルティッシモが最初の24点をパラッツォ・ヴェッキオに送ったときにさかのぼり、画家が1587年に死去するまで制作が続いた。ヴァザーリの『美術家列伝』第2版(1568年)には、空白の名前5点、制作中の教皇29点とともに、すでに描かれた219点の人名が列記されている¹⁹⁾。それにしても「地図の間」には気宇壮大な構想がつまっているものだ。権力者は世界の占有をめざしたのだ。

Ⅲ フランチェスコ1世の特異な気質と彫玉

コジモ1世とエレオノーラがパラッツォ・ヴェッキオに居を移した翌年、長男のフランチェスコ1世(1541-87)が誕生した。彼は宮廷で君主になるべく養育され、1565年、24歳のときに皇帝マクシミリアン2世の妹ジョヴァンナ・ダウストリア(1547-78)と結婚し、1574年、33歳でコジモ1世の跡を継いで大公に即位した²⁰⁾。

ところがフランチェスコ1世はとびぬけた知性を有しながら、父と違って政治にはまったく無関心な内向的性格であり、オカルト学と錬金術と芸術に没頭した。幼年期から特異な気質の持ち主だったことは、4歳下の妹クレツィアへの贈り物だったと考えられる、メダル《フランチェスコ1世の肖像》(個人蔵)が、鉛に油彩画という変わった製法であることからもうかがえる。

名門ハプスブルク家との政略結婚にも不満

で、愛人ビアンカ・カペッコ(1548-87)を溺愛し、ジョヴァンナの死と同時に彼女と再婚することになる。愛の形見の真っ赤な珊瑚製の《メディチ家とカペッコ家の紋章のある指輪》(銀器博物館)が残っている。大公冠の下にメディチ家とカペッコ家の紋章が寄り添う意匠である。また、フランチェスコ1世がビアンカ・カペッコに捧げた《フランチェスコ1世の蠟細工肖像》(バルジェッロ国立博物館)は2人の不滅の愛を今に伝えている。肖像の下にある楕円形フレームのなかの紙に手書きで次のように書かれているのだ。「愛するビアンカへ/ピサよりわが肖像を/あなたに送ります、それはわれらの名匠/チェッリーノが私を描いたもの/わが心を受け取ってください/フランチェスコより」²¹⁾。

メディチ・コレクションが倍增するのは、この綺想の君主フランチェスコ1世時代のことである。コジモ1世が「スクリットイオ・ディ・カリオペ」に蒐集した至宝の数々は、フランチェスコ1世時代にはパラッツォ・ヴェッキオ内の「ストゥディオーロ」(1575年完成)、サン・マルコ修道院の隣の「カジーノ・ディ・サン・マルコ」(1575年完成)、フィレンツェ郊外の「プラトリーノの別荘」(1575年完成)などに移されて分蔵されたが、さらに増大するコレクションを統合するためにフランチェスコ1世は壮大な構想を抱き、ベルナルド・ブオンタレンティ(1531-1608)に設計を依頼して、ウフィツィ宮殿(現、ウフィツィ美術館)の最上階に八角形の「トリブーナ」を建造させた。ブオンタレンティのプランは当時の人間観・世界観・宇宙観を体系化したもので、「地」(貴重な色大理石)、「水」(貝殻でおおわれたヴォールト)、「火」(赤い絹の壁)、「空気」(風見鶏)の四大元素で構成されている。四大元素と性質、黄道十二宮、方角、気質の照応関係は表のとおりである。

この「トリブーナ」は1584年に完成したが、フランチェスコ1世は1587年に46歳で急逝したので、コレクションを完璧に陳列した姿で目にする事はなかった。「トリブーナ」の最初の

【表】四大元素と性質，黄道十二宮，方角，気質の照応関係

元素	性質	黄道十二宮	方角	気質
火	熱+乾	巨蟹宮, 獅子宮, 処女宮	南	黄胆汁質
空気	熱+湿	白羊宮, 金牛宮, 双子宮	東	多血質
水	冷+湿	磨羯宮, 宝瓶宮, 双魚宮	西	粘液質
土	冷+乾	天秤宮, 天蠍宮, 人馬宮	北	黒胆汁質

財産目録が作成されたのは、その弟フェルディナンド1世の治世2年目の1589年のことである²²⁾。同年に挙行されたフェルディナンド1世とクリスティース・ド・ロレーヌの結婚式典に合わせて「トリブーナ」は整備されたのだ。

しかし、すでにフランチェスコ1世はメダルやコインや彫玉や貴石製容器やオウム貝製品の数々を多数蒐集し、「トリブーナ」に置くためのキャビネットを1583年頃にやはりブオンタレンティに発注している。製作に約3年を要した八角形小神殿型黒檀製キャビネット（消失）は「ストゥディオーロ」と呼ばれた。「ストゥディオーロ」は「トリブーナ」と相似形であり、「トリブーナ」の中央テーブルの上に置かれた高級家具である。黒檀に貴石が象嵌され、雪花石膏製の円柱と角柱、鍍金の鱗でおおわれた円蓋、そして54の大型収納箱と120の小型収納箱が付いていた²³⁾。

その「トリブーナ」の「ストゥディオーロ」を飾っていた可能性のあるのが、ラピスラズリ製カメオ《怪人面》（銀器博物館）である。フィレンツェで作られたエキゾチックな怪人面であり、口を不気味に開けて歯を見せている。失われた瞳は別の素材が使用されていたはずで、さらに神秘的な妖気を漂わせていたことだろう²⁴⁾。

紺碧のラピスラズリ製品と対照的なのが、乳白色の瑪瑙製カメオ《フランチェスコ1世のインプレーザ》（銀器博物館）である。イタチが薬用植物ヘンルーダをくわえ、上部には「VIRTU CONTRA FURORE（美德は激情に抗する）」という文字帯が刻まれている²⁵⁾。ちなみにパラッツォ・ヴェッキオの五百人広間にある《フランチェスコ1世のインプレーザ》では、同じ図像

に「AMAT VICTORIA CURAM（勝利は敏捷を愛する）」と文字だけが異なっている。

フランチェスコ1世は弟のフェルディナンド枢機卿がローマに滞在していた関係で、ローマの骨董市に貴重品が売りに出されていないかどうか、つねに情報収集を怠らなかった。1575年、ヴィテルヴォ司教セバステアーン・グアルティエーロの相続人ジュリオ・グアルティエーロが多数の貴重品を売りに出したとフェルディナンド枢機卿が伝えてきた。大公は多数の宝物を購入したが、そのなかにサイズとテーマの双方でとびぬけて重要なカメオがある。13人以上の人物と4頭の馬を彫った、横幅8センチもある玉髓製カメオ《フェリベ2世の凱旋入城》（銀器博物館）である。このカメオには異例にも、右端に「DNICVS ROMANVS」という製作者ドメニコ・ロマーノのラテン名が刻まれている。彼は16世紀後半のローマで活躍したドメニコ・コンパーニ通称ドメニコ・デ・カンメイの可能性が高いが、定かでない。このカメオは1556年にスペインとフランスの外交上の贈答品としてヴィテルヴォ司教に贈られたものであろう。フランチェスコ1世はカメオを入手すると、主題をコジモ1世のシエナ入城式（1560年）に改変するために、フェリベ2世の肖像をコジモ1世の肖像に作り替えるようお抱え彫玉師に命じた。実際には変形は免れたが、この記録から明らかになるのは、既存の彫玉がしばしば思いつきで手が加えられることがあり、その結果、製作者や製作年の特定が非常に難しくなることである。

フェルディナンド枢機卿を通じて、あるローマ貴族がフランチェスコ1世の関心を惹起しようとした発掘品のカメオがあった。玉髓製カメ

オ《ガニユメデスと鷲》(考古学博物館)である。赤色のまさった鷲と白色のガニユメデスの色彩コントラストが鮮やかな技巧を凝らした作品であるが、古代品ではなく古代品を写した同時代品とする説もある。右端のガニユメデス(オリュンポス山で酌係になるので、足許に酒壺が転がっている)と左端の鷲(ゼウスが変身)は確かとして、中央の男性はゼウスかどうか、女性はヴィーナスかヘラか、人物の解釈が定まっていない。フェルディナンド枢機卿は購入に積極的だったが、フランチェスコ1世がしぶったようで、売り手側は値打ちを誇張して言葉をつくし、あげくは厳しい条件をつけてフィレンツェへの発送を遅らせたほどである。結局、1574年に大公が50スクードという安値で購入したが、売り手と買い手の思惑が交錯する商談に長い時間を要した一例である²⁶⁾。

どのジャンルにも分類しがたい、高さ37.5センチの《黒檀と象牙の回転式球体》(銀器博物館)は、フランチェスコ1世の特異な気質を象徴しているようでもある。バイエルン公爵夫妻の象牙工房で製作されたこの不思議なオブジェは、1589年の「トリブーナ」の財産目録にも、1591年刊行のボッキ著『フィレンツェ市の美しさ』にも登場する驚異品である。フランチェスコ1世は1565年のミュンヘン旅行でミラノ出身の研磨職人ジョヴァンニ・アンブロージョ・マッジョーレと会って親交を深めたが、これはそのマッジョーレの傑作である²⁷⁾。実用性はないが高度な職人技を要する作品、そういうものをフランチェスコ1世はこよなく愛した大公である。

バイエルン公爵夫妻が出たところで、メディチ家とハプスブルク家の関係を整理しておきたい。ハプスブルク家の皇帝フェルディナント1世(1503-64)の長男が皇帝マクシミリアン2世(1527-76)、次男がティロル大公フェルディナント2世(1529-95)。マクシミリアン2世の長男が皇帝ルドルフ2世(1552-1612)。そして皇帝フェルディナント1世の娘アンナと結婚したのが、ミュンヘンのバイエルン公アルブレヒ

ト5世(1528-79)である。メディチ家のフランチェスコ1世は1565年、皇帝マクシミリアン2世やティロル大公フェルディナント2世の妹ヨハンナ・フォン・エスターライヒ(ジョヴァンナ・ダウストリア)(1548-78)と結婚した。この結婚に際して、メディチ家がハプスブルク家にシャンボローニャのブロンズ浮彫やアステカの仮面を贈っていることを考えるならば、アルプスの南と北でコレクションが行き交ったことは重要な意味をもっていた。とりわけフランチェスコ1世の義兄のティロル大公フェルディナント2世のアンブラス城のコレクションが典型的な「驚異の部屋」として発展していくからである。チェッリーニ作の《フランソワ1世の塩壔》(ウィーン、美術史美術館)なども、一時はアンブラス城にあった²⁸⁾。

IV フランチェスコ1世の貴石製容器

フランチェスコ1世は「カジーノ・ディ・サン・マルコ」と「ストゥディオーロ」に、ジョヴァンニ・バッティスタ・チェルヴィ、アンニバレ・フォンターナ、ガスパロ・ミゼローニ、サラッキ兄弟、カローニ家(アンブローシオとステファノ兄弟)、ガッファリ家(ジョルジョが有名)、そしてフランドル出身のハンス・ドメスやデルフト出身のジャック・ピリヴェルトといった国際的な職人集団を抱えて、貴金属や貴石に綺想の形態を与えた。最後のジャック・ピリヴェルトは新しい大公冠の製作者であり、彼の工房の腕の冴えは《女性頭部のある装飾品》(バルジェッロ国立博物館)でも十分に立証済みである。名品の数々は評判を聞き及んだ皇帝ルドルフ2世に嫉妬羨望の念を抱かせたほどである。

フランチェスコ1世がとりわけ愛した素材は、紺碧のラピスラズリである。16世紀の最高品質のラピスラズリはサファヴィー朝ペルシアのアフガニスタン産である。《ラピスラズリ製カップ》(銀器博物館)の貝殻か小舟のような形の石の碗は、ミラノ出身の宮廷職人カローニ家

が製作した可能性が高い。フィレンツェ人ジョヴァンニ・バッティスタ・チェルヴィ (1532-86) が製作した、緑の美しい鱗のある蛇とも魚ともつかない幻想的な形の金とエナメル製の把手が妖しい魅力を放っている。ブオンタレンティがデザインしたという説もあるが史料上の確証はない。《ラピスラズリ製深皿》(銀器博物館)は、1579年にカジーノ・ディ・サン・マルコで製作されたことがわかっている。小舟の形の深皿のデザインは、素描が残っているのでブオンタレンティだろう。カラフルでグロテスクな金とエナメル製の怪人面の把手はハンス・ドメス作である²⁹⁾。

貴石製容器の最高傑作のひとつは、高さ40.5センチの堂々たる大作《ラピスラズリ製容器(フィアスカ)》(銀器博物館)である。ブオンタレンティのデザインに基づいて(素描が現存している)、カジーノ・ディ・サン・マルコの工房でおそらくはミラノ人ジャン・ステファノ・カロニが容器を製作した。脚部の石にフランチェスコ・デ・メディチの頭文字「FM」とメディチ家の紋章と「1583年」の年記がある。容器の下部にはアカンサスの葉、両肩には2体の怪鳥ハルピュイアイが彫られている。ハルピュイアイから金とエナメル製の長い首がのびて金製頭部と連結している。金とエナメルの装飾はジャック・ピリヴェルトが担当し、1581年から84年にかけて製作した。3人の天才の合作により、見事な素材と高い技術の融合した美しいフォルムを生み出すことに成功している。ラピスラズリに含まれる黄金色の黄鉄鉱のまだら模様がさらに価値を高めている。蓋を開けると細い頸部から大量の液体を入れることが可能であり、その高度な技術には驚きを禁じえない。以上の3点とも「トリブーナ」の1589年の財産目録に記載がある³⁰⁾。

V フランチェスコ1世の「メディチ磁器」

1574年(コジモ1世の没年)に作成された

「グアルダローバ」の財産目録によれば、メディチ家は(中国製および中東製の)白磁322点、青磁75点を所有していた³¹⁾。白磁は硬度と光沢がとりわけ称賛された。これだけ所有していれば、模倣して製造したくなるのが人情だろうが、製造方法がわからない。ヴァザーリは、『美術家列伝』第2版(1568年)で、フランチェスコ1世が1560年代から磁器工房を開いて試作の実験に乗り出したと伝えている³²⁾。

ヨーロッパ最初の磁器は、1709年、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト1世時代に作られた「マイセン磁器」である。それより100年以上さかのぼる1575年に、フランチェスコ1世が「メディチ磁器」の製造に成功した。ただしこれは正確には磁器ではない。白土、珪石、ソーダ、明礬などさまざまな素材を混合して焼成した「磁器もどき」であって、本当の磁器に不可欠な磁土カオリンを含んでいない。しかし、限りなく磁器に近づいた焼き物であることは確かである。

フランチェスコ1世が歴代大公のなかでもひとときユニークなのは、カジーノ・ディ・サン・マルコの工房であまたの錬金術師に混じってみずから「メディチ磁器」の製造に朝から晩まで没頭したことである。窯印はフランチェスコの頭文字「F」や大聖堂のクーボラ、大公冠やメディチ家の紋章などである。各地の君主に贈っているが、1582年にはスペイン王フェリペ2世に贈呈している。1587年(フランチェスコ1世の没年)の「グアルダローバ」の財産目録によれば、「メディチ磁器」は820点もあるが、現存するのはセーヴル国立陶芸美術館(9点)、ヴィクトリア&アルバート美術館(9点)、ルーヴル美術館(6点)、大英博物館(4点)、メトロポリタン美術館(4点)などに60点ほどしかない³³⁾。

一般に、色は白地に青(コバルトを焼成した青すなわちコバルト・ブルー)の爽やかな明朝風の「青花(ピアンコ・エ・ブル)」が多く、逆に形状や文様は西洋風のオリジナルなものが多い。

最初期かつ最重要の大作が《水差し(プロッ

カ)) (デトロイト美術館) である。渦巻き形の持ち手はグロテスク人面で胴部とつながり、注ぎ口の周囲には丸鬘装飾が施されている。胴部には大公冠の下にメディチ家の紋章とハプスブルク家の紋章、そしてラファエレスクなグロテスク文様があしらわれている。とりわけグロテスク人面が特徴的だが、全体のデザインとモデリングがブオンタレンティに帰されているのも納得できる。描いたのは、1573年から78年に大公の磁器工房で焼成の責任者だったウルビーノ出身の陶画家フラミニオ・フォンターナと考えられる。2000年にデトロイト美術館が購入するまでの履歴が完全に史料で追跡できる一例であり、それだけ本作の重要性がうかがえる。

小ぶりながら貴重なのが、卵形の《酒瓶(フィアスカ)》(ワシントン・ナショナル・ギャラリー) である。胴部に描かれた唐草文様は、明朝様式もしくは明朝様式を写したイスラーム様式すなわちイタリア語で「スティーレ・トゥルケスコ(トルコ様式)」と呼ばれたものを模倣している。ヨーロッパ初の磁器が誕生したと誤解されたのも、もっともなことである。

逆に、《薬味瓶(アンポツラ)》(ボストン美術館) は、色調以外は完全に西洋独自のものである。油と酢を注ぐ二口の洋梨形の形状もユニークならば、蟹、蛙、蜘蛛、鰻など17種の水棲動物が戯れる図柄もチャームングである。動物の図柄は、画家アルブレヒト・デューラーか陶工ベルナルド・パリッシー(1510?-90)の素描、あるいはもっと可能性が高いのは、1577年からフランチェスコ1世に仕えたヴェローナ人画家ヤコポ・リゴツィ(1547?-1627)の素描に基づいて、陶画家ジョアッキーノ・ディ・グイードが描いたと推定されているが、確証はない。余白の広さがのびのびとした自由な開放感を与える作品である。

数ある皿のなかでも、《大皿》(個人蔵) は、もっとも大きくもっとも美しい皿である。模様はラファエレスクなグロテスク文様で、中央に人面、周囲にグリフィンやプットやケンタウロスや有翼の幻想動物などが優美な衣紋をもって

繊細に描かれている。前述の《水差し(ブロッカ)》(デトロイト美術館) との類似性から、ブオンタレンティの素描に基づく同時期の作品で、陶画家フラミニオ・フォンターナの筆になると推測されている。

やはりラファエレスクなグロテスク文様が(同じくフラミニオ・フォンターナの筆で) 描かれた同時期の作品《「サウル王の死」の描かれた皿》(ニューヨーク、メトロポリタン美術館) がある。『旧約聖書』の「サムエル記」に登場するサウル王(前10世紀) は、ペリシテ人や周辺民族と勇敢に戦ってイスラエル王国を建国した初代国王であるが、ギルボア山でペリシテ軍に敗北し、剣の上に身を投じて死んだ。その場面が中央に描かれている。サウル王の死が、初代トスカーナ大公コジモ1世の死(1574年) と同一視されて、2人に共通する美德が称えられているのだ。さらにはサウル王の部下のダヴィデがやがて王国を繁栄に導くことから、コジモ1世の後継者のフランチェスコ1世を称える意図も隠されているかもしれない。現存する作品のなかでは、大公冠とメディチ家の紋章が裏面にいっしょに描かれた唯一の作例である。

「メディチ磁器」のなかの変わり種は、《フランチェスコ1世の肖像》(バルジェッロ国立博物館) であり、他に類例のない君主へのオマージュ作品である。大公の右腕の「P」の頭文字は、1576年からフィレンツェに住み、1592年に84歳で没したメダル製作者パストリーノ・パストリーニの作であることを示している。フィレンツェには、「メディチ磁器」はこの作品を含めてわずか3点しか残っていない³⁴⁾。フランチェスコ1世代ではかなく消え去った幻の磁器である。

VI フェルディナンド1世の貴石製容器と貴石製胸像

フランチェスコ1世の弟のフェルディナンド1世は、1563年から87年まで、年齢でいうと14歳から38歳までの20年以上、枢機卿としてローマで暮らしたが、1587年に兄が死去す

ると、1588年に還俗してトスカーナ大公に即位した。兄が政治に不向きだったのと対照的に、フェルディナンド1世は父コジモ1世の政治向きの性格を受け継いでいた。コレクションにかける情熱は父や兄譲りであったが、ある意味では兄の業績を否定しようとした形跡があり、「カジーノ・ディ・サン・マルコ」や「ストゥディオーロ」にあった宝物を「トリブーナ」に移して前2者を荒廃させたばかりか、プオンタレンティに「トリブーナ」用の新しいキャビネットを作らせて、兄のキャビネットを交換した。

「トリブーナ」の最初の財産目録の作成は、前述のように1589年、つまりフェルディナンド1世の治世2年目のことであり、どこまでがフランチェスコ1世時代の宝物で、どこからがフェルディナンド1世時代の宝物かが判別しにくいという研究上の困難がある³⁵⁾。以下に紹介するのは、すべて1589年の「トリブーナ」の財産目録に記載された傑作である。

高さ8.5センチの《2つの把手付き酒杯》(銀器博物館)は、白く輝く美しい東方の玉髓製の器が特徴的な古代品である。16世紀作の金縁には様式化した豊饒の角と植物文様、エナメル製の小さな2つの把手は緑色のイルカの形がかわいらしい。一方、高さ8.5センチの《2つの把手付き酒杯》(銀器博物館)は、対照的に暗赤色の湾曲した東方の瑪瑙製の器が特徴的な古代品である。16世紀作の2つの把手の尖端の緑色の部分は前脚のある虎の頭の形である。1588年に金細工師ジョヴァンニ・ドメスが製作したものと推定されている。

以上は古代の容器だが、16世紀の作品には想像を絶する綺想の形態を有するものがある。高さ34センチの黄色がかった碧玉製の《ヒュドラ形容器》(銀器博物館)である。製作者は諸説があったが、現在では容器も装飾もミラノ人のサラッキ工房説が有力である。ヘラクレスと7つの頭をもつヒュドラが表現されているが、1589年の「トリブーナ」の財産目録によれば、蓋の上に立つ「金製のヘラクレス」の他にも「7個のダイヤモンド、27個のルビー、22個の真珠、14

個の石榴石」が付いた豪華さである。ヒュドラの首の付け根にある青いエナメル製の怪人面もおどろおどろしい。綺想の点では、高さ21センチのカラフルな碧玉製の《ドラゴン形容器》(銀器博物館)もなかなかのものである。碧玉には赤や黄などさまざまな色があるが、バルガ産の「バルガ」はピンクと白の斑点模様があり、コルシカ産の「コルシカ」は緑青色である。シチリア産やベーメン産にも独自の色がある。碧玉という素材自体がもつ独特のどぎつい色彩がこの奇怪な形を導き出したといえるだろう。

水晶製容器にも観るべきものが多い。高さ38.5センチの《ガレー船形卓上水盤》(銀器博物館)は、船尾の2頭のイルカのあいだに騎士の浮彫のある塔が建っている。胴体には「マナの収集」「岩から水を出すモーセ」といった旧約聖書の場面。金製の把手は怪鳥ハルピュイアイ。蓋には両手をあげる海獣。ギリシア神話とキリスト教と中世騎士物語と同時代の幻想動物とモチーフの点でも贅沢である。これは1589年のフェルディナンド1世とクリスティーン・ド・ロレーヌの結婚に際してサラッキ兄弟が製作したものである。同じサラッキ工房の「ガレー船」シリーズには、高さ12.4センチの水晶製《ガレー船形卓上水盤》(銀器博物館)があり、こちらには船主にドラゴンの頭が彫られている。

1589年の婚礼に際して作られた、サラッキ工房の「怪鳥」シリーズには《怪鳥形容器》(銀器博物館)やドラゴンの頭をもつ《怪鳥形容器》(銀器博物館)がある。「魚」シリーズには《魚形容器》(銀器博物館)や《魚形容器》(銀器博物館)があり、どちらも脚部は2頭のイルカ形である。魚形容器の表面は細かい植物文様がびっしりと覆い尽くしており、無機質な鉱物に有機的な動植物を人工的に彫ることで、自然と人工が高度に融合した作品となっている。透明な石の魚が空を飛ぶイメージは、シュルレアリスティックでさえある。

このように列記してみると、16世紀に水晶製品がいかに愛玩されたか、そして彫石の技術も15世紀に比べるといかに高度になったかがよ

くわかる。

貴石製容器の変種というか亜種というか進化形ともいえるべきものに、貴石と貴金属を組み合わせた胸像がある。《ティベリウス帝の胸像》(銀器博物館)は、頭部がショッキングなブルーのトルコ石、胸部が金、台座が東方の瑠璃でできている。これは枢機卿時代のフェルディナンドが、1580年に金細工師アントニオ・ジェンティーリ(1519-1609)に注文したもので、胸部にはメドゥーサの頭がある。1589年から「トリブーナ」の棚にはこの種の胸像が数多く並んでいた。

胸像はローマ皇帝の場合が多いが無名女性のこともある。高さ5.8センチの小さな《女性胸像》(銀器博物館)は、顔が赤褐色のジルコン製、胸部が雪花石膏製、衣服が鍍金の銀製である。高さ6.7センチの《女性胸像》(銀器博物館)は、顔が赤褐色のジルコン製、髪が金製で髪留めに4個の小粒のダイヤモンドがはめ込まれている。衣服は白、青、黄のストライプのエナメル製で、胸に1個の大粒のダイヤモンドを付けている。台座は花模様のエナメルを施した金製。胸像の背中には開閉式の小さなドアがあるので、小物入れだったことがわかる³⁶⁾。

Ⅶ 大公妃クリスティーヌ・ド・ロレーヌの貴石製容器

1589年4月30日、カトリーヌ・ド・メディシスの愛孫クリスティーヌ・ド・ロレーヌがフェルディナンド1世と結婚するためにフィレンツェ入城をはたした。夫婦仲のよさは、金製メダル《フェルディナンド1世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌ》(バルジェッロ国立博物館)やカメオ《フェルディナンド1世とクリスティーヌ・ド・ロレーヌ》(バルジェッロ国立博物館)、そして《クリスティーヌ・ド・ロレーヌの肖像のある指輪》(銀器博物館)などからも折紙付きである。

「マダマ(奥方)」と呼ばれてフィレンツェ人からも敬愛された彼女が、メディチ・コレク

ションの拡充に貢献したことが近年の研究で明らかになってきた。同年1月5日に死去した祖母カトリーヌから12万スクードの価値の遺品を相続したのだ。クリスティーヌのフィレンツェへの持参品リスト(1589年)には水晶製容器21点、他の貴石製容器27点を含んでおり、同年に「トリブーナ」の最初の財産目録が作成されたことも偶然ではない。ウフィツィ内には「マダマの部屋」が開設されたほどである。ヴァレリオ・ヴェッリ作の有名な《宝石箱》の他にも、カトリーヌから受け継いだ遺品の数々は傑作ぞろいである³⁷⁾。

水晶製《ノアの箱船の皿》(銀器博物館)は、300スクードと評価されたカトリーヌの遺品である。いちばん外側の周囲の8つの銀装飾には「アブラハム」「イサク」「ヨシュア」「ヤコブ」「モーセ」「ダヴィデ」「ソロモン」「復活したキリスト」の8人。中間層は4体の風神が吹く風によって各種の鳥が中央の円形に向かって猛烈な勢いで渦巻いている。中央円形部分には、右端にひざまずくノア、そして象、駱駝、牛、羊、猪、犬といった動物のつがいのほか、左端には一角獣が1頭ぼつねんと佇立している。製作者のカステルボロニーゼ出身の彫玉師ジョヴァンニ・ベルナルディ(1496-1553)は、ローマでイッポーリト・デ・メディチ枢機卿や教皇クレメンス7世の保護を受けていた人物で、これを1546年頃にペリン・デル・ヴァーガの素描に基づいて製作した。

水晶製《蓋付きカップ》(銀器博物館)は、バランスの美しい、おしゃれな作品である。カップの胴体はアカンサスの葉と植物文様が浮き彫りにされているのに対して、瀟洒な足はつるりとして模様がな。カップはミラノ人ガスパロ・ミゼローニの製作と推定されており、カトリーヌの所有だった時期(夫アンリ2世が死去した1559年より前)にフランスでこれまたおしゃれな金とエナメル製の蓋が追加された。白色と黒色で6回くりかえされる「HC」のモノグラムは、アンリ2世とカトリーヌの夫婦の頭文字であるが、このモノグラムを「D」の組み合

わせと解釈すると、アンリ2世の愛人ディアヌ・ド・ポワティエ(1499-1566)の頭文字になるという問題の作品である。蓋の摘みが三日月形であることも、月の女神ディアナ(ディアヌ)を連想させる。300スクードと評価されたカトリーヌの遺品である。

ラピスラズリ製《蓋付きカップ》(銀器博物館)もカトリーヌの遺品である。石には彫りがなく、白い斑点がアクセントになっているだけで、単純ですっきりとしたシャープな形である。金とエナメル装飾には43個の真珠が使われている。

高さ8.4センチの比較的小さな緑玉髓製《カップ》(銀器博物館)もカトリーヌの遺品である。1589年のリストには14個のルビーが付いていると記されているが、いまではルビーの多くが失われた。それでも、ゆがんだ楕円形の縁に海獣(2枚の鰭がある)の頭がついているおもしろい形で、脚部も中心軸からずれて絶妙なバランスをとっている作品である。

すっとした立ち姿が印象的な、高さ13.6センチの《蓋付き容器》(銀器博物館)は、色彩のグラデーションが鮮やかな紅縞瑪瑙製の古代品である。瑪瑙(アゲート)にはじつにさまざまな色があり、シチリア産のものは黄色味がかったり、インドのゴア産のものは真っ赤な血の色である。平行の縞模様があるものを縞瑪瑙(オニックス)、その縞模様が赤褐色やカラフルな虹色のものを赤縞瑪瑙(サードニックス)と呼ぶ。フランス工房作と推定されるルビーやガラス片をちりばめた豪華な金製の蓋の頂には、史料によれば、蛇形の把手が付いていたはずである。

六角形のピラミッド型の水晶製《容器(フィアスカ)》(銀器博物館)もカトリーヌの遺品である。3層からなり、上の2層には総状装飾、花綱装飾、グロテスク文様がびっしりと彫り込まれ、最下層には「バッコス」(葡萄)、「ポモナ」(果実)、「ミネルヴァ」(オリーブ)の神々が確認できる。製作者にはミゼローニ工房説の他にサラッキ工房説もある。

クリスティーヌがフィレンツェに持参した最高傑作のひとつが、碧玉製《容器(フィアスカ)》(銀器博物館)である。碧玉にも赤、茶、緑などいろいろあるが、これは「シチリア産の碧玉」と史料に記された茶系の碧玉である。放射状に線が彫られた二枚貝の美しいフォルムをしている。二枚貝を結合する金製の帯(下方に葉飾りがある)には、多数の真珠とエメラルドがちりばめられていたが、いまは真珠が点々と残るだけである。容器の中央には4個のルビーとカラフルなエナメル装飾に囲まれた縞瑪瑙製カメオ「ムーア人の頭部」が付いている。製作者はミラノ人サラッキ工房説が有力であるが、ミラノ人ヤコボ・ダ・タツツァ説などもある。いずれにせよ傑作であることに間違いはない。

東方の瑪瑙製の《小壺》(銀器博物館)は、全体が螺旋状にねじれた変わった形をしている。瑪瑙製の蓋も逆バラスター形で変わっている。尖端の摘みは金に青色のエナメルが施してある。いちばん驚くべきは、緑色の頭と赤色の胴体をもつ派手なドラゴン形の2つの把手である。製作者も製作年も不確かであるが、クリスティーヌの持参品として1589年の財産目録に記録されている。

変わり種の小品をもう1点紹介しておきたい。東方の瑪瑙製《小壺》(銀器博物館)である。高さがわずか6センチと低い割にずんぐりとした胴部に、金とエナメル製の2匹のドラゴンが把手としてへばりついている。白地に金の斑点のあるドラゴンの形が、カエルとカタツムリ(ルビーを背負っている)の合体のようで、なんとも奇妙な愛嬌がある。ドラゴンの首に残るリングが、かつて鎖で吊るされていたことを示している。蓋には青色の果実のエナメル装飾、脚部には黒色のエナメル装飾がある。製作者も製作年も不確かであるが、これもやはりクリスティーヌ・ド・ロレーヌが1589年に持参した逸品である。

Ⅷ フランチェスコ1世とフェルディナンド1世のオウム貝製品

フランチェスコ1世は自然の驚異と人工の驚異の結合を好んだが、彼のコレクションにあった最高傑作のひとつは、オウム貝を2つ組み合わせた作品《二重オウム貝製の把手付き水差し(メッシローバ)》(銀器博物館)である。オウム貝は南太平洋に棲息する軟体動物で、貝殻がオウムの嘴の形に似ていることからこの名がついた。「生きた化石」と呼ばれる珍しい東方の生物である。これにフランドル工房の熟練職人の手になると推測される、技巧の粋を凝らしたドラゴン形の注ぎ口や蛇形の把手が加えられて、ルビーとトルコ石がちりばめられている。高さ30センチの作品である。注ぎ口のドラゴンの形は明らかに中国の龍からヒントを得ているが、脚部はニュルンベルク工房の作風であり、全体の装飾は折衷的といえるほどに各地の要素が複雑に混雑している³⁸⁾。

オウム貝は16世紀前半から数多く中国(明朝)の広東からやって来たが、中国産と断定できるのは、《二重オウム貝製の容器》(銀器博物館)のように、オウム貝自体に中国人や植物の模様が施されているからである。この作品は、1618年にカジーノ・ディ・サン・マルコからパラッツォ・ヴェッキオの「グアルダローバ」に移されたが、16世紀のコレクションだったものである。金属装飾も風変わりであり、製作場所はフランドル説の他にドイツ説や中国説まであり、17世紀に作り替えられた可能性もある³⁹⁾。

《オウム貝製のソース容れ》(銀器博物館)の2点は、パリの職人フランソワ・クルヴクールが1555年から1565年のあいだに金属装飾を施したもので、3頭の細いイルカが支える脚部が同形である。前者のオウム貝の表面には中国人と建物のカラフルな彩色が施され、後者には大胆にそりかえる龍の図が施されている。これらは中国のおそらくは広東の工房で製作されたものである。ともに1618年にカジーノ・ディ・サン・マルコからパラッツォ・ヴェッキオの「グアル

ダローバ」に移された記録があるが、フェルディナンド1世の花嫁クリスティーヌ・ド・ロレーヌがフィレンツェに持参した可能性が高い⁴⁰⁾。

《オウム貝製の容器》(銀器博物館)は、オウム貝自体に手が加えられていない代わりに、金属装飾が例外的に手の込んだ精妙さである。オウム貝の口縁には馬頭魚尾の海馬2頭、頂上にはカタツムリにまたがる小人がちょこんと座っている。オウム貝を支える台座の脚部が奇妙で、ターバンとスカートを身につけたエキゾチックな人物が右手にもつ鎖につないだライオンの尻尾が蛇の形になっている。

オウム貝製品の変種として、《巨大カタツムリ形容器(ヴェルサトイオ)》(銀器博物館)を最後にあげておきたい。これはオウム貝の貝殻をカタツムリの殻に見立てて、銀製の胴体に組み合わせたもので、長さが32.8センチもある。実際のカタツムリの殻ではこれだけの迫力を出せないのだから、置物として十分に見応えがある。なんの意味もないが、目を楽ませるファンシーな優品だ。

注

- 1) AA. VV., *Pontormo, Bronzino, and the Medici*, Philadelphia, 2004, p. 122.
- 2) *Ibid.*, p. 128.
- 3) AA. VV., *The Medici, Michelangelo, and the Art of Late Renaissance Florence*, New Haven and London, 2002, pp. 235-241. 以下、*The Medici*と略記。このカタログにはコジモ1世のメダル14点の表面と裏面が載っている。
- 4) Allegri, E., Cecchi, A., *Palazzo Vecchio e i Medici*, Firenze, 1980, pp. 290-293.
- 5) AA. VV., *Palazzo Vecchio: committenza e collezionismo medicei*, Firenze, 1980, p. 153. 以下、*Palazzo Vecchio*と略記。
- 6) マリアリータ・カザローザ・グァダーニ、松本典昭訳「メディチ家の彫玉コレクション」『阪南論集 人文・自然科学編』第44巻第2号、2009年、78-80ページ。
- 7) AA. VV., *Le gemme dei Medici al Museo degli Argenti*, Firenze, 2007, pp. 263-264; *Palazzo Vecchio*, pp. 147-150; Massinelli, A. M., Tuena, F., *Il Tesoro dei Medici*, Firenze, 2000, pp. 74-75. 以下、*Tesoro*と略記。Sframeli, M. (a cura di), *I*

- gioielli dei Medici: dal vero e in ritoratt*, Livorno, 2003, pp. 62-63. 以下, *Gioielli* と略記。
- 8) *Palazzo Vecchio*, pp. 154-151; *Gioielli*, p. 63.
- 9) *Palazzo Vecchio*, pp. 294-302.
- 10) 1553年の財産目録は, Conti, C., *La prima reggia di Cosimo I de' Medici*, Firenze, 1893.
- 11) 「グァルダローバ」のブロンズ像については, Massinelli, A. M., (a cura di), *Bronzetti e Anticaglie nella Guardaroba di Cosimo I*, Firenze, 1991.
- 12) コジモ1世が設立したタペストリー工房は, 1737年のメディチ家断絶まで続く。Adelson, C., 'Cosimo I de' Medici and the Foundation of Tapestry Production in Florence', in AA. VV., *Firenze e la Toscana dei Medici nell' Europa del '500*, Firenze, 1983, III, pp. 899-924; Meoni, L., 'The Legacy of Michelangelo in the Grand-ducal Tapestry Workshops of Florence, from Cosimo I to Cosimo II', in AA. VV., *The Medici, Michelangelo, and the Art of Late Renaissance Florence*, pp. 95-101.
- 13) エリーザベト・シャイヒャー, 松井隆夫・松下ゆう子訳『驚異の部屋——ハプスブルク家の珍宝蒐集室』平凡社, 1990年, 31ページ。
- 14) チェッリーニ, 古賀弘人訳『チェッリーニ自伝(下)』岩波文庫, 1993年, 237ページ。
- 15) 関根秀雄・斎藤広信訳『モンテニュー旅日記』白水社, 1983年, 239ページ。
- 16) Pacetti, P., *The Hall of Geographical Maps in Palazzo Vecchio*, Firenze, 2014, p. 20.
- 17) *Palazzo Vecchio*, p. 304.
- 18) この地図については, Fanelli, G., *Firenze*, Firenze, 1980, pp. 121-126, 270-271.
- 19) 全員の名前は, *Palazzo Vecchio*, pp. 304, 310-312.
- 20) フランチェスコ1世については, Breti, L., *Il principe dello studiolo, Francesco I dei Medici e la fine del Rinascimento*, Firenze, 1967.
- 21) Mosco, M. (ed.), *Meraviglie*, Firenze, 2003, p. 32. 以下, *Meraviglie* と略記。
- 22) トリブーナの財産目録は, Bertelà, G. G., *La Toribuna di Ferdinando I de' Medici: Inventari 1589-1631*, Modena, 1997.
- 23) アンナ・マリア・マッシネッリ, 松本典昭訳「コジモ1世とフランチェスコ1世時代のメディチ・コレクション」『阪南論集 人文・自然科学編』第45巻第1号, 2009年31-40ページ。および前掲「メディチ家の彫玉コレクション」81ページ。
- 24) AA. VV. *Magnificenza alla corte dei Medici*, Milano, 1997, p. 88. 以下, *Magnificenza* と略記。
- 25) *Magnificenza*, p. 89.
- 26) 前掲「メディチ家の彫玉コレクション」80-81ページ。*Magnificenza*, p. 85.
- 27) *Magnificenza*, p. 77; *Meraviglie*, p. 15.
- 28) ドイツ語圏については, 小宮正安『愉悦の蒐集——ヴンダーカンマーの謎』集英社, 2007年。森貴史編『ドイツ王侯コレクションの文化史——禁断の知とモノの世界』勉生出版, 2015年。アンブラス城のコレクションについては, シャイヒャー, 前掲書, 75-133ページ。
- 29) AA. VV., *Il Tesoro dei Medici al Museo degli Argenti*, Firenze, 2009, pp. 70-71. 以下, *Museo degli Argenti* と略記。Massinelli, A. M., Tuena, F., *Il Tesoro dei Medici*, Milano, 2000, pp. 80-86.
- 30) *Museo degli Argenti*, p. 73; *Magnificenza*, p. 164.
- 31) Spallanzani, M., *Ceramiche alla corte dei Medici nel Cinquecento*, Modena, 1994, p. 50.
- 32) Vasari, G., *Le opere di Giorgio Vasari*, a cura di Milanese, G. Firenze, 1891, vol. 7, p. 615.
- 33) Spallanzani, *op. cit.*, p. 86; *Palazzo Vecchio*, pp. 181-186; Alinari, A., *La porcellana dei Medici*, Ferrara, 2009; *Magnificenza*, pp. 403-404; *The Medici*, pp. 247-251. 佐藤サアラ「十五、十六世紀のイタリアにおける中国磁器の様相——メディチ家財産目録を視点として」, 遠山公一・金山昌弘編『美術コレクションを読む』慶應義塾大学出版会, 2012年, 137-160ページ。
- 34) 所蔵点数については, Spallanzani, *op. cit.*
- 35) 以下, *Museo degli Argenti*, pp. 74-105.
- 36) *Tesoro*, pp. 120-123.
- 37) 以下, *Museo degli Argenti*, pp. 106-135.
- 38) *Magnificenza*, p. 119; *Meraviglie*, p. 39.
- 39) *Magnificenza*, p. 120; AA. VV., *Dalle Indie orientali alla corte di Toscana: Collezioni di arte cinese e giapponese a Palazzo Pitti*, Firenze, 2005, p. 70.
- 40) *Magnificenza*, p. 121; *Dalle Indie orientail*, p. 70.

(2015年11月20日掲載決定)